

吉行淳之介・丸谷才一・開高 健＝編集

現代日本のユーモア文学 6

立風書房

佐藤	春夫
里見	淳
尾崎	一雄
久生	十蘭
北	杜夫
小松	左京
井伏	鱒二
牧野	信一
安岡	章太郎
木下	杳太郎
富岡	多恵子
野坂	昭如
小山	内薫
伊藤	整
中島	敦



白竹淳之介・丸谷才一・開高 健＝編集

現代日本のユーモア文学 **5**

立風書房

現代日本のユーモア文学
第五集



1981年1月30日 第1刷発行

定価 1,000円

現代日本のユーモア文学 5

編者 吉行淳之介／丸谷才一／開高健
発行者 下野博
発行所 立風書房

東京都品川区東五反田3-6-18
郵便番号141 振替/東京5-74493
電話/東京(03)447-1191(代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社
製本所 株式会社難波製本

0393-R5905-8909

現代日本のユーモア文学 第五集目次

舟橋聖一

華燭……………6

武田泰淳

もの食う女……………22

梅崎春生

Sの背中……………34

侵入者……………67

邱 永漢

長すぎた戦争……………82

宮沢賢治

ビヂテリアン大祭……………108

加藤楸邨

俳句五句……………152

〔吹越〕より四句、「死の塔」より一句

山本周五郎

人はなんによって生くるか……………156

対話（砂について）……………162

ごったくや……………167

〔青べか物語〕より

後藤明生

火事の話……………178

山口 瞳

鳩胸の鳩……………188

半村 良

身の上ばなし……………200

お洒落……………205

〔女帖〕より

山之口貌

石に雀……………212

音楽……………214

鹿と借金……………216

小島信夫

吃音学院……………220

色川武大

ぐれはまちどり……………264

今日出海

天皇の帽子……………284

舟橋聖一

華燭

華燭

（須本一橋両家結婚披露宴は、今やデザートコースに入った。媒妁人H博士が立上って、型通りの仲人挨拶をやった。次ぎに、新郎の前に席を占めた来賓B氏、O氏、K氏らの祝辞があり、次いでボーイ長らしいのが、私の椅子のうしろに近づき、肩をつくようにして、どうぞ、といった。私はナプキンをおき、椅子から立った）

只今、御指名に預りました日熊であります、本夕は名だたる朝野の名士が、ずらりと並んでおいでになる真ン中で、私のような末輩者が立上って何かお話を致すということは、まことに僭越きわまることと存ずるのであります、ひらに御用捨を願いましたところ、司会者においてはお許しがなく是非とも、何か祝辞をいえということでございますので、お祝いごとに、無^む躰^{たい}な御辞退も却ていかかと考えまして、非礼をはばからず、ここに立上りましたような次第でありまして、あらためて、満堂の各位の御諒解を得たいと存ずるのであります。ヘン（ト軽く咳払いをする）

ただ今、媒妁人のお話を承りまして、このような御良縁はまたとないことを、確信いたしましたのであります、思いきって、ぶちまけて申上げますと、本夕の花婿花嫁を、一番正確に知っておりますの

は、私を措いて他にないと考えるのであります。こんなことを申上げては、大変、お耳障りかは存じませんが、この席にお集まりの皆さま方にしても、花婿側の方は、花婿を知っておいになつても、花嫁のことは御存知ない。また、花嫁のことには詳しいお方でも、お婿さんのことは、まるで知らないという風に、一方的な知識しかお持合せがないのではないか。そこで、媒妁人が、御両家並びに新郎新婦の御紹介をして、皆さまにお近づきを願おうという趣旨が、本夕の御披露の宴と相成つたものと考えるのであります。その御両家、御両人の両方に通じている点、私が、私ごときをしてこの席に立上らせる光榮を担ふことの出来た所以ではないか。強いてそうでも考えませんことには、このような盛大な華燭の典にあたり、一言でも二言でも、テーブルスピーチをするというような、晴れがましいことは、到底、私の任に非ざることが、明白なのでございます。エヘン（ト、もういちど、咳払いが出る）

新郎、須本浪夫君は、私とは、学校友達、いや、古くからの親友であるのであります。ごらんの通りの美青年でありますが、性情は直情径行と申しますか、竹を割ったようなところがありまして、従つて、妥協のない、ごまかしのきらいな、思ったことは、ドシドシ実行に移すといったところのある、強い性格が、この美しい花嫁を獲得された根本の理由ではないか。どうも、お話が脱線して行きそうではありますが、今暫く御清聴下さい。（末席の方で、誰やら、しっかりやれと、掛声をかける者あり）

さて、須本君は、そういう性格の男でありますから、女沙汰などは微塵もなかったことを、私は証明いたしました。むしろ、いうならば、女ざらいといった方が、適切であるかもしれない。そして、かく申す私もまた、女ざらいであるのであります。（末席から、再び、嘘をつけなど叫ぶ者あり。宴はたけなわ、早くも美酒に酔う者あつて、半畳でも入れたくなつたと見える）そこで、女ざらい同士

の間には、特に強い友情が炎^もえ上ったわけでありまして、当時、クラスメートの中には、盛んに、新宿や洲崎へ通ったり、五反田や大塚へんの花柳界に足を運ぶ者が多かったのでありますが、須本君は断然、これに反対でありまして、私と盟約を結び、あくまで、正しい童貞を守りつづけようと頑張ったのであります。本夕の宴にあつて、その昔の友愛の純情を想えば、そぞろに、万感の走るのを感じる次第であるのであります。(シンと水をうったように静かである)

二人は、その頃、よく旅行を致しました。須本君は、画才に恵まれていて、至るところスケッチブックに山川草木を写生して歩くのが得意でありましたが、なかなかどうして、素人ばなれのした手腕をもっているものでありました。私は、至って平凡な能なしでありますから、いわば、須本君のお供をして歩いたようなものであります。一番よく出かけたのが、信州、上州、それから伊豆方面でありまして、殊に、浅間山の周辺をグルグル歩き廻っていると、月日のたつのも忘れるくらいで、山田、万座、法師、発^{はうば}咄、熊の湯などと、あまり人の行かない温泉を選んで泊り、次第には、上信越の国境を越えて、越後の方まで、歩をのばしたものであります。そういう生活の中でも、須本君は、あくまで女ぎらいを押し通して参ったのであります。実に、潔癖そのものであります。私も、むろん、それに負けず劣らずでありまして、自然、須本君と私の間で、どっちが先に、この禁断を破るかということが、一ツの興味ある宿題となつたのであります。エッヘン。ところで、新婦の一橋季子さん——もとへ——すでに本日の黄道吉日^{こうどうきちにち}を卜^{ぼく}して、大神宮の御前で厳肅なる婚礼の御儀を取り結んだのでありますから、須本季子さんと申上げなければならのであります。季子さんの美貌^{びよう}については、これまた、満堂の各位の認められるところでありまして、美男美女好一对の、洵^{まこと}にお目出たい御祝儀でございます。さて、私と季子さんとは、幼なじみであるのであります。季子さんが須本君と相知る半年前から、私とは知合^{しあひ}つておつたのであります。それは、東京へ戻る須本君と別れてすぐ信州杳^{しょう}掛

から、追分の方へ向う中仙道の途中でありました。季子さんは、自転車に乗って、背ろから疾走し来たって、私にぶつかりそうになり、ベルを鳴らしながら、ハンドルを右へ切ったのですが、生憎、私も右へ身体をよけたので、タイヤは私の足にぶつかり、撞ぶつとそのまま、畑の方へ二人とも、ぶっ倒れてしまったのであります。打ちどころが悪かったか、季子さんは、一瞬、気を失った様子で、豆畑へ首をつつこんだまま、足は自転車の下敷になっております。私のズボンも、横にえらく鉤裂きが出来ております。そのとき季子さんは、忘れもしないナチュラルグレーのカーデガンに、濃い紅のスカートをはいいて、ノーストッキング。倒れた拍子に、腕輪の紐がきれたと見えて、彫りのある小さい鉱石の玉が、路傍に四散しているけしきが、今なお、ありありと、この目に見えるようであります。私は、少しびっこを曳きながら立上り、季子さんの腰の上に乗っている自転車を引きおこしました。すると、季子さんの、ノーストッキングの白い脛に真赤な血が垂れているではありませんか。これは大変だと思いました。取りあえず自転車を反対側の道へ片づけ、季子さんを抱きおこそうと致しますと、気を失った季子さんは、きれいな瞳をパッと見ひらいて、（ごめんなさい）と、あやまるのでありました。私は、そのとき、こんな清らかな、澄み切った瞳は、曾かつて見たことがない。世間では、宝石や玉を、美しいといって珍重するが、それは、もとより、死物であって、美しい女の瞳にくらべたら、比較にも何ンにもなるものでない。女の瞳の美しさを知らないものが、ダイヤモンドや真珠を有難がるにすぎず、このような美しいものが、人間の身体の中にある以上、何を好んで、ダイヤモンドや真珠の価値をとにかくいうのでありましょうか。（突然、ヒヤヒヤというものあり）

そのことがあって、私はすぐ、東京の須本君のところへ、手紙を書きました。その手紙を書いたのは、軽井沢の小さいバンガロオでありました。紅いホヤのスタンドをつけると、窓のすぐ前に、大きな栗の木があって、その白い花が、まるで雪かと思わせるほど、白く硝子ガラスにうつりました。

私は、こんな風に書き出したのであります。

須本君。君に、ぜひとも、見せたいものがあるのだ。唐突に、こんな言い方をしては、君を面喰わせるかもしれないが、君が見たらそれを何というかは、興味深い問題なのだ。何だと思うか。カンのいい君は、早くも僕の胸の底まで見抜いてしまったような気がする。というのは、一人の美しい女性の出現さ。君が苦々しい顔をするのが目に浮かぶようだ。ところが、これだけはぜひ見て貰いたい。その女性に会って以来、僕は、実は宗旨を変えた。その女性の美しい瞳を見たら、今までの宗旨を変えずばならなかった。今まで、君も知る通り、女の美しさなんて、まやかしのものだと思っていた。そんなものに心を乱し、胸の波をかき立てるようなことは、男として、見識の低いことと、あくまで己れを持っていたつもりだが、今日、はからずもあった一人の女性に、僕はまんまと、虜とりことなってしまったのだ。もっとも、僕はまだ、彼女を恋したとまでは、言わないつもりだ。ただ、彼女の美しさ、魂をゆすぶられてしまったのだ。こんな美しい瞳があるのに、人はなぜ、ダイヤモンドや真珠のような死物を宝といって、愛するのだろうと、大いに疑問を生じたほどだ。須本君よ。許せ。今や、女ざらいをもつて任じることの不見識を自ら嗤わらわずにはいられなくなったのだ。いつか、君と僕は、歌舞伎十八番「鳴神なるかみ」という芝居を見たことがあった。あのとき、君は舞台をさして、女という女は、みな、あの雲の絶間姫たえまひめのように、化生である。あんなに用心深くしていても、男は結局、馬鹿を見る。君も自分も、鳴神上人にはなりたくないものだと、語った。僕は今、あの舞台面を思い出すのだ。果して彼女が雲の絶間姫であるか否か。君の鑑定を待ちたい。請う君、一日も早く、碓氷うすいの峠を越して光来し給え――。

そんな風にかき綴ったのであります。(このとき、ボーイ長がやってきて、時間がないから、早目に切り上げるようにと書いた紙片をわたした)

エヘン。時間がないという司会者からの注意であります。なるべく、早く、本筋に入りたいと存ずるのでありますが、話の全貌を適確に知って戴くためには、こんな風に、花道から叙述いたしませぬことには、真意のところ、申上げにくいのであります。(つづけてやれ! と叫ぶ声もあり)

ところで、折返し、須本君からの返事があったのであります。その手紙は、一言一句、激しい批難に充滿しているのであります。須本君は、私の改宗を、世にも憎むべき裏切として、徹頭徹尾、攻撃の矢を放って参ったのであります。私は軽井沢のバンガロオで、大いに流涕りゅうていしつつ、その手紙を幾回となく読みかえし、須本君の友情には、満腔の感謝をよせるとともに、如何せん、この友とも、別れる時の来たことを悟らずにはいられたのであります。(このとき、また、ボーイ長来たり、肩を引く。宴会場も、何ンとなく、騒然たる感あれども、そのまま、スピーチをつづける)

私は、押し返し、再び須本君のもとへ、手紙を書いたのであります。世の中の女を悉く、雲の絶間姫と見る君の見解は、もはや、偏見ではないか。彼女の、曇りなき瞳には、かの魔女のもつ心の濁りはあり得ない。一步をゆずってかの女を、仮りに雲の絶間姫なりと致しても、それに共鳴し、それに傾倒して、自ら破戒し、女を抱いて、壇よりすべり落ちる鳴神上人自身は、世にも幸福な男ではないであろうか、(突然、つまみ出せと叫ぶものあって、場内はいよいよ、騒然とし来たり、H博士は、薬罐頭より湯氣を立てて、退場する様子であったが、私は一段と声をはりあげて)満堂の淑女並びに紳士各位。御清聴、御清聴。私のスピーチは、これからいよいよ、佳境に入らんとするのであります。(ト、背ろむきのまま、見得を切ったが、再び、演説口調に戻った)

各位は、鳴神のことを嗤うことは、出来ないものであるのであります。彼は、とくに、雲の絶間姫が、化生の女であることを見破っていたのであります。知らずして、彼女の誘惑に引かかったと見るのは、浅薄な見方であるのであります。とつくの昔に、彼女が魔女であることは、上人の坎に、

アップルしないわけがないのであります。上人は、それを知っていたが、それでも、彼女を避けることが不可能であつたんだと、私は存ずるのであります。人間は、しまった、しまったと思ひながら、進んで深味へはまるものであります。雲の絶間姫にしてやられることを、重々、存じておりながら、その誘惑に克てない。そして、自分から、それに、まんまと、引かかつて行つたのであります。

芝居で演じますと、雲の絶間姫は、上人の前で、ことさらに裾をまくって見せ、赤い蹴出しから、抜けるように白い脛を見せたり、上人の前で頬をおこして、上人にかかえられて、乳房からお臍の下まで、触らせたりするのであります。いかに道心堅固の上人でも、女のお乳やお臍やまたそのお臍の下の方まで、触っているうちには、一念勃起して、道徳心を放擲するに至るのは当然のことであるのであります。それでもなお且つ、冷静たりうる者があるとすれば、それはすでに、あの世の人である仏様でありましょう。この世の人間には、上人であるうが、何ンであるうが、絶対に我慢の出来ることではない。エッヘン。ここに列席しておられる各位にしても、男も女も——鳴神を女で見せる趣向の狂言に「女鳴神」があることは、各位の御存知の通りでありまして、これはアベコベに鳴神尼に對するに美男雲の絶間之助をもつて、なやましき煩惱の情理をつくした狂言であります。すなわち、早く申せばどんな淑女でも紳士でも、煩惱にはうち克ち難いのでありまして、私の場合、今様雲の絶間姫ならぬ一橋季子さんの、白い脛に、赤い血の走る光景を見た瞬間、この世のものとも思へぬ美しさと観じたのは洵に無理からぬことなのであります。（ボーイ長来たり、私の肩を執つて、席より放たんとするが如し。私もまた、強硬に、彼の胸を小突いた）

さて、それより、数カ月後、私は須本君に、会つて、直接にこの話をうちあげました。須本君も、手紙の時とは、うって變つて、熱心にきいてくれたものであります。話が半ばすぎる頃から、須本君の心が少しずつ、動いたように見えたのであります。エヘン、エヘン。

「そんなに美しいのか」

「実に、美しいのだ。君だって、一目で恋をしてしまふだろう」

「とんでもないことだ。女は、化粧しているからこそ、美しいといわれる。女から、口紅と白粉を除いたら、どうなるというんだ」

「そんなことを、言合っても、埒があかない。一度でいいから会ってくれ。君は、きっと認めてくれるだろう。なるほど美しいといって、目を瞞るだろう。僕は君に、参ったといわせたいのだ」

「会わなくなつて、大体、わかるよ。君の好きなタイプは——」

「タイプなつてもじゃないんだ」

「そんなに君が、いうのなら、会つて見てもいい。その前に、一ツ君にきいておきたいことがある」

「何んだ、須本君——」

「最初の手紙に抛ると、君はまだ、彼女に恋をしているのではない。ただ、その美貌に、一驚したという風に書いてあつたね」

「その通りだ」

「君の恋人として、きまつてしまったものなら、僕が会つて、とやかく、言つたところで始まらん。そうでなく、君と僕とが同じ立場から、彼女が美しいか否か、検討したいという客観的な問題であるなら、会つてみてもよろしいと思う」

「それで結構なのだ」と、私は、心弱くも、そう答えたのであります。では、会おうということに、相成りました。(三人ほどの暴漢が、私を場外へつれ去らんとした。然し、私は怯まなかつた。ここまですつた以上最後のしめくりをつけないことには、テーブルスピーチとして、体裁をなさないではないか)

エッヘン。そこで、須本君は、季子さんにはじめて会いました。自転車事故のあった約半年後でありました。季節は冬でありました。もっと正確にいきますと、クリスマスイブでありました。場所は、季子さんが卒業した志田女子学園のバザー。この日、寒さにもめげず季子さんは、何と、ナチュラルグレーのカーデガンに、紅のスカート、首飾り、腕輪とも、かの沓掛から追分に向う、落葉松と百合の咲く中仙道を、ピカピカの自転車で疾走した時と、同じ服装をして、余興の舞台効果係をやっていたのであります。

私は、もっと、奢侈なコスチュームに着飾った季子さんを想像していたので、しまったと思いました。これでは、須本君が感心するはずはない。女ぎらいなどという条、案外、女に目の肥えている須本君のことですから、よっぽど、堂々と、豪華な恰好をしていないと、いい点はくれないだろう。ところがこともあらうに、ナチュラルグレーのカーデガンでは、軽井沢風景である。それも、舞台裏で、引玉かなんぞを、

ドドドド——と引く役なので、顔には埃を浴びているらしい。白粉もつけないようで、髪なども、パサパサしておったのであります。

「あれだよ——あのんだよ」

と、私は、舞台の奥を指さしました。須本君は、

「へエ、あれ？」

といったきり、何ンともいわず、ジッと瞳を凝らしている風でありましたが、やがて私と一緒に、余興場のベンチに靠れて、

「平凡じゃないか」

と、一語、いいましたので、私は返す言葉もなく、ただ、悪いところを見せてしまったと思ったの